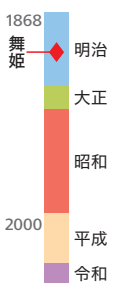


舞姫

森鷗外



◆石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱灯の光

◆石炭をばはや積み果てつ 石炭はもう積み終えてしまった。

◆熾熱灯の……徒なり 白熱電灯の光が暗れがましいのも無駄なことに感じられる。

1 骨牌 [caro (ポルトガル語)] トランプ。

2 セイゴン [Saigon] サイゴン。ベトナム南部の港湾都市。現在のホーチミン市。

◆日ごとに……なしけん 毎日毎日どれほど多くの言葉を書き連ねたことであろうか。

◆心ある人は……見けん 思慮分別のある人はどのように思ったことだろうか。

3 ニル・アドミライイ [nil admiran] (ラテン語)「何事にも驚かず、無感動な心理状態。」

4 気象 気質。

5 うきふし ちらさや悲しき。

6 言ふも更なり 言うまでもない。

◆行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかに
◆か見けん。こたびは途に上りし時、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、
◆安逸にてももの学びせし間に、一種のニル・アドミライイの気象を
◆や養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。

◆げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世のうきふしをも知りたり、人の心の頼み難きは言

ふも更なり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せん。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

7 ああ、プリンヂイシイの港を出でてより、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、
9 微恙にことよせて房のうちにのみ籠もりて、同行の人々にも物言ふことの

7 プリンヂイシイ [Brindisi] プリンヂイジ。アドリア海に臨むイタリアの港町。
8 生面 初対面。
9 微恙 軽い病気。

◆少なきは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、
◆瑞西の山色をも見せず、
◆伊太利の古跡にも心をと

◆腸日ごとに……我に負はせ はらわたが日に九回転するほどの激しい苦しみを私に負わせ。

◆どめさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、
◆腸日ごとに九廻すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、
◆文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、
◆幾度となく我が心を苦しむ。ああ、いかにしかこの恨みを銷せん。もしほかの恨みなりせば、
◆詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなん。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、
◆今宵は辺りに人もなし、
◆房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほ程もあるべければ、
◆いで、その概略を文に綴りてみる。

◆ああ、……銷せん ああ、どのようにしてこの恨みを消し鎮めたらよいか。

◆余は幼き頃より厳しき庭の訓へを受けしかひに、父をば早く喪ひつれど、学

◆房奴の……あるべければ 船室付きのボーイがやって来てスイッチをひねって電灯を消すのにもまだ間があると思われるので。

10 庭の訓へ 家庭教育。

問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館に在りし日も、東京に出でて予備費に通ひし時も、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名譽なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三年ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を超えし母に別るるをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れて柏林の都に來ぬ。

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこの歐羅巴の新大都の中央に立てり。何らの光彩ぞ、我が目を射んとするは。何らの色沢ぞ、我が心を迷はさんとするは。菩提樹下と訳する時は、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪のごときウンテル・デン・リンデンに來て両辺なる石畳の人道を行く隊々の土女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に寄りたまふ頃なりければ、さまざまの色に飾りなしたる礼装をなしたる、顔よき少女の巴里まねびの粧ひしたる、かれもこれも目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせて走るいろいろの馬車、雲に

そびゆる樓閣の少しとぎれたる所には、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみながら落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる凱旋塔の神女の像、このあまたの景物目睫の間に集まりたれば、初めてここに來し者の応接に暇なきもうべなり。されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動かさじの誓ひありて、常に我を襲ふ外物を遮りとどめたりき。

余が鈴索を引き鳴らして調を通じ、公の紹介状を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手続きだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、我が故里にて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼らは初めて余を見し時、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過ぐすほどに、公の打ち合はせも済みて、取調べもしいに、はかどりゆけば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、つひには幾巻をかなしけん。大学のかたにては、幼き心に思ひ計りしがごとく、政治家になるべき特料のあるべうもあらず、これかかれかと心迷ひながらも、

11 旧藩の学館 江戸時代に各藩が藩士やその子弟のために設けた学校。藩校。

12 予備費 東京大学予備門。旧制第一高等学校の前身。

◆一人子の我を……慰みけらし 一人っ子の私を頼りとして暮らす母の心はさぞかし慰められたことであろう。

◆官長の覚え殊なりしかば 官長の信任が格別に厚かったのだ。

◆余は模糊たる……立てり 私は漠然とした功名の思いと、自己を律することに慣れた勉強への意欲とをもって、何はさておきこのヨーロッパの新大都の中心部に立ったのだった。

13 大道髪のごとき 広い道がまっすぐに延びていることの形容。

14 ウンテル・デン・リンデン ベルリン市中心部を貫く目抜き通り。[Unter den Linden (ドイツ語)は「菩提樹の下」の意。

◆胸張り……驚かさぬはなきに 胸を張り肩をそびやかせた士官たちで、まだウィルヘルム一世が通りに面した宮殿の窓辺にお立ちになった時代であったので、さまざまの色に飾り立てた礼服を着た者や、美しい少女たちでパリ風の装いをしている者など、あれもこれも目を驚かさぬものはない上に。

15 維廉一世 [Wilhelm I] 一七九七年～一八八八年。初代ドイツ皇帝。

16 ブランデンブルク門 [Brandenburger Tor] ウンテル・デン・リンデンの西端にある門。

17 凱旋塔 ブランデンブルク門の西北にある戦勝記念の塔。

◆このあまたの……うべなり これらたくさん見るべきものが狭い範囲に集中していたので、初めてここを訪れた者が見学に追われるのも、もつともなことである。

◆鈴索を……調を通じ 呼び鈴を引き鳴らして面会を求め。

18 普魯西 プロイセンの英語名。ドイツ北東部にあった王国(首都はベルリン)でドイツ帝国建設の中心となった。当時、日本ではドイツ帝国全体をプロシアと呼んでいた。

◆名を簿冊に記させつ 氏名を登録し、学籍をおいた。

◆大学の……あらず 大学のほうは、幼稚な頭で思い描いていたような、政治家になるための特別な学科があるはずもなく。

二、三の法家の講筵に列なることに思ひ定めて、謝金を取め、行きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包み難きは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我が身の今の世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、またよく法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余はひそかに思ふやう、我が母は余を活きたる辞書となさんとし、我が官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、きはめて丁寧にいらいへしつる余が、この頃より官長に寄する書にはしきりに法制の細目にかかづらふべきにあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗を嚼む境に入りぬ。

◆官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懐きて、人並みならぬ面持ちしたる男をいかでか喜ぶべき。危ふきは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我が地位を覆すに足らざりけんを、日頃伯林の留学生の中にて、ある勢力ある一群れと余との間に、おもしろからぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またつひに余を讒誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの手をも取らぬを、かたくななる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつは嫉みたりけん。されどここは余を知らねばなり。ああ、この故よしは、我が身に知らざりしを、いかでか人に知らるべき。我が心はかの合歡といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我が心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道を歩みしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬほどの勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。故郷を立ち出づる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、また我が心のよく耐へんことをも深く信じたりき。ああ、かれも一時。舟の横浜

◆法家の講筵に列なる 法律学者の講義に出席する。

◆時来れば……好尚なるらん 時が来れば、包み隠しても隠しきれないのが人間がもつて生まれた性向というものらしい。

19 所動的 受動的。
既に……当たりたればにや すでにずいぶん長くこの自由な大学の雰囲気になれていたためであろうか。

20 獄を断ずる 判決を下す。

◆法制の……広言しつ 法制度の細目に拘泥すべきでないことを述べ、ひとたび法の精神さえ会得したならば、入り乱れた万事は竹を割るように簡単に解決できるだろうと大きなことを言った。

21 蔗を嚼む境 物事よさやおもしろみがわかるような境地。

◆官長は……したりけめ 官長はもとと自分の思いどおりを利用してできる器械をこそ作ろうとしたのだろう。

22 讒誣する 事実をゆがめて、他人を悪く言うこと。

◆されど……なくてやは しかし、これにしてもしその理由がないはずがあるうか、あったのだ。

◆ああ、……知らるべき ああ、この理由は、私自身ですらわからなかったのに、どうして他人にわかることができようか。

23 合歡 マメ科の落葉高木。和名ネムノキは夜になると葉を閉じることに由来する。あるいは、ここではオジギソウを指すか。

24 長者 年長の人。

25 有為の人物 才能があつて、将来が期待される人物。

を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手中を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなか我が本性なりける。この心は

生まれながらにやありけん、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

◆かの人々の嘲るはさることなり。されど嫉むは愚かならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、²⁶赫然たる色の衣をまとひ、珈琲店に座して客を引く女を見ては、行きてこれに就かん勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふ²⁷レエベマンを見ては、行きてこれと遊ばん勇氣なし。これらの勇氣なければ、かの活発なる同郷の人々と交はらんやうも



19世紀末のベルリン市街図

なし。この交際の疎きがために、かの人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならずで、また余を猜疑することとなりぬ。◆これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閱し尽くす媒なりける。

ある日の夕暮れなりしが、余は²⁸獣苑を漫步して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我が²⁹モンビシウ街の僑居に帰らんと、³⁰クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、³¹楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、³²頬髭長き猶太教徒の翁が戸前にたずみたる居酒屋、一つの梯は直ちに³³樓に達し、他の梯は穴蔵住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて立てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしたずみしこと幾度なるを知らず。

今この所を過ぎんとする時、閉ざしたる寺門の扉に寄りて、声のみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされて顧みたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底まで徹したるか。

◆せきあへぬ……本性なりける とめることができない涙にハンカチを濡らしたのを我ながらおかしいと思ったが、これこそがむしろ自分の本性だったのだ。

◆かの人々の……さることなり あの人たちが嘲るのもっともなことである。

²⁶ 赫然たる 輝いている様子。

²⁷ レエベマン 「Lebemann (ドイツ語)」 上流階級の遊び人、道楽者。

◆これぞ……媒なりける これこそが私が無実の罪を負って、僅かな時間に計りしれないほどの大きな苦難を経験し尽くすなかだちになったのである。

²⁸ 獣苑 ティーアガルテン 「Tiergarten (ドイツ語)」の訳。ブランデンブルク門の西方にある大森林公園のこと。もと皇帝の狩猟場であった。

²⁹ モンビシウ街 「Monbijou Strasse」 ヘルリン市内の街の名。

³⁰ 僑居 仮の住居。ここでは、下宿。

³¹ クロステル巷 クロステル 「Kloster Strasse」の界隈。中世以来の古い寺院が多い。

³² 木欄 手すり。

³³ 猶太教徒 モーゼの律法を基礎とし、エホバ(ヤハウエ)を信奉する一神教の教徒。

◆何故に……徹したるか どうしてほんの一目見ただけで、用心深い私の心の底まで達したのか。

34 彼ははからぬ深き嘆きに遭ひて、前後を顧みる暇なく、ここに立ちて泣くや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えずそばに寄り、「何故に泣きたまふか。◆」ところに係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらん。」と言ひかけたが、我ながら我が大胆なるにあきれたり。

◆彼は驚きて我が黄なる面をうち守りしが、我が真率なる心や色に現れたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとく酷くはあらじ。また我が母のごとく。」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひたまへ、君。我が恥なき人とならんを。母は我が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯へだになし。」

◆あとは歎歎の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女の震ふうなじにのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、まづ心を鎮めたまへ。声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに。」彼は物語りするうちに、覺えず我が肩に寄りしが、この時ふと頭をもたげ、また初めて我を見たるがごとく、恥ぢて我がそばを飛びのきつ。

人の見るが厭はしきに、早足に行く少女のあとにつきて、寺の筋向かひなる

大戸を入れれば、欠け損じたる石の梯あり。これを上りて、四階目に腰を折りて潜るべきほどの戸あり。少女はさびたる針金の先をねち曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老媪の声して、「誰ぞ。」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあららかに引き開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媪にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を履きたり。◆エリスの余に会釈して入るを、彼は待ち兼ねしごとく、戸を激しくたて切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふと油灯の光に透かして戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。◆これ過ぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞こえしが、また静かになりて戸は再び開きぬ。先の老媪は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を掛けたり。左手には粗末に積み上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を覆へる臥床あり。伏したるは亡き人なるべし。竈のそばなる戸を開きて余を導きつ。この所はいはゆるマンサルドの街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向かひて斜めに下がる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつかふべき所に臥床あり。中央なる机には美

34 彼 ここでは「少女」を指す。明治期の文語文では男女の区別なく用いられることが多かった。

◆ところに……あらん この地につながるのあつた人をもたない私のような外国人は、かえつて力を貸しやすきこともあるだろう。

◆彼は……現れたりけん 彼女は驚いて私の黄色い肌の顔をじつと見つめていたが、私の真面目な気持ちが顔に表れていたのであらうか。

◆母は……打ちき 母は私が彼の言葉に従わなからと言つて、私をたたきました。

◆明日は……かなはぬに 明日は葬式を出さなければならぬのに。

35 歎歎 すすり泣き。

◆声を……往来なるに 泣き声を人に聞かせなさいますな。ここは往来ですから。

15

36 あららかに 荒々しく。

37 獸綿 厚手の毛織物。

◆エリスの……たて切りつ エリスが私に会釈して入るのを、老女は待ちかねたように、扉を荒々しく閉め切つた。

◆これ……名なるべし これが亡くなったという少女の父の名なのであらう。

10

38 厨 台所。

39 マンサルド 「mansarde(フランス語)」屋根裏部屋。

15



しき氈⁴⁰を掛けて、上には書物一、二巻と写真帳とを並べ、陶瓶⁴¹にはここに似合はしからぬ高き花束を生けたり。そが傍らに少女は羞^{はづか}を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火^{ともしび}に映じて微紅^{うつくれなみ}を潮したり。手足の纖^{かほ}くたをやかなるは、貧家の女^{せみな}に似ず。老媪^{おや}の室を出でし後にて、少女は少し訛^{なま}りたる言葉にて言ふ。「許したまへ。君をここまで導きし心なさを。君

は善き人なるべし。我をばよも憎みたまはじ。明日に迫るは父の葬^{はな}り、頼みに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼はウイクトリア座⁴²の座頭^{がしら}なり。彼が抱へとなりしより、はや二年^{ふたとせ}なれば、事なく我らを助けんと思ひしに、人の憂ひに付け込みて、身勝手なる言ひ掛けせんとは。我を救ひたまへ、君。金をば薄き給金を割きて返し参らせん。よしや我が身は食らはずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身を震はせたり。その見上げたる目^まには、人に否とは言はせぬ媚態^{びたい}あり。この目の働きは知りてするにや、また自らは知らぬにや。

我が隠⁴⁴しには二、三マルクの銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひのモンビシユウ街三番地にて太田^{おほた}と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」少女は驚き感ぜしさま見えて、余が別れのために出だしたる手を唇に当てた

るが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背^{そびら}に注ぎつ。
ああ、なんらの悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我が僑居^{けいきま}に來し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレル⁴⁷を左にして、終日兀座^{ひねもすこつざ}する我が読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を初めとして、余と少女との交はりやうやく繁^{しげ}くなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了^{すみ}にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。我ら二人の間にはまだ痴駈^{ちがい}なる歡樂のみ存じたりしを。

その名を指さんはばかりあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官長のもとに報じつ。さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。公使がこの命を伝ふる時余に言ひしは、御身もし即時に郷に帰らば、路用⁴⁹を給すべけれど、もしなほここに在らんには、公の助けをば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我が生涯にて最も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時に^い出だししものなれど、一

は母の自筆、一は親族なる某^{なにかし}が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書^{かみ}なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の

40 氈 獸毛で織つたテールブルクロス。
41 陶瓶 陶製の花瓶。

◆ 我をばよも憎みたまはじ 私をまさか憎んだりなさらないでしょう。

42 ヴイクトリア座 [Victoria Theater] ヘルリンにあった劇場。

◆ 彼が抱へと……言ひ掛けせんとは 彼の一座に入つてからもう二年にもなるので、なんの問題もなく私たちを助けてくれるだろうと思つていたのに、人の不幸につけ込んで身勝手な言いがかりをつけるなんて。

43 よしや たとえ。

44 隠し ポケット。

45 マルク [Mark] この作品で描かれた当時のドイツで使われていた通貨単位で、四マルクでほぼ一円に相当した(鵬外在独当時)。

46 シヨオペンハウエル [Arthur Schopenhauer] 一七八八年〜一八六〇年。ドイツの哲学者。
47 シルレル [Friedrich von Schiller] シラー。一七五九年〜一八〇五年。ドイツの詩人・劇作家。

48 兀座 じつと座り続けること。

◆ 彼らは……存じたりしを 彼らは早合点にも、私のことを、女遊びの相手を舞姫たちの群れにあさつているとみなしたのである。私たち二人の間にはまだ子どもじみた楽しみがあっただけなのに。

◆ さらにぬだに……官長は そうでなくても私が学問から外れた脇道を走っていることに気づいて憎々しく思つていた官長は。

49 路用 旅費。

運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時までではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師の募りに応じて、この恥づかしき業を教へられ、クルズス果てて後、ヴィクトリア座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隷と言ひしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にてつなわれ、昼の温習、夜の舞台と厳しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をもまとへ、場外にてはひとり身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養ふ者はその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、賤しき限りなる業に堕ちぬはまれなりとぞいふなる。エリスがこれを逃れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼き時よりも読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタアジュと唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相知る頃より、余が貸しつる書を読み習ひて、やうやく趣味をも知り、言葉の訛りをも正し、幾ほども余に寄する文にも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまづ師弟の交はりを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きし時に、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に関はりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ。こは母の余が学資を

失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

ああ、詳しくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛づる心にはかに強くなりて、つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしを怪しみ、また誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、初めて相見し時より浅くはあらぬに、今我が数奇を憐れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてどまらんには、学資を得べき手だてなし。

この時余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、伯林にとどまりて政治学芸のことなどを報道せしむることとなしつ。

社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、棲家をも移し、午餐に行く食店をも変へたらんには、かすかなる暮らしは立つべし。とかう思案するほどに、心の

50 クルズス [Krusas (ドイツ語)] 講習。課程。ハックレンデル [Friedrich Wilhelm von Hacklander] 一八一六年～一八七七年。ドイツの詩人・小説家。

52 温習 練習すること。おさらい。芝居の……いかにぞや 芝居の化粧部屋に入れば紅や白粉をつけ、きれいな服も身にまとうけれども、一歩外に出れば自分一人の暮らしも十分でないので、親兄弟を養う者の辛苦はどれほどのものであろう。

◆ されば……言ふなる だから彼女たちの仲間が賤しい仕事に身をおとさない者はまれであると言われている。

53 コルポルタアジュ [Korporatur] (ドイツ語) 書籍類の行商。

◆ かかれば……生じたるなりき こういうわけなので、私たち二人の間にはまづ師弟の交わりが生まれたのであった。

54 不時 思いがけない時。予定外。

55 数奇 不運。

◆ その美しき、……いかにせん その美しくいじらしい姿は、悲しみに心乱れて、冷静な判断ができなくなった私の脳髓を射貫き、自分でもよくわからない間にこのような関係になってしまったことをどうしたらよいのか。

57 官報 国民に周知させるべき事項を掲載した、政府発行の文書。

58 とかう とかく。あれこれと。

誠を顯して、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余はキヨオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。この截り開きたる引き窓より光を取れる室にて、定まりたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に貸して己は遊び暮らす老人、取引所の業の暇を盗みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷やかかなる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小女が持て来る一杯の珈琲の冷むるをも顧みず、空きたる新聞の細長き板ぎれに挟みたるを、幾種となく掛け連ねたるかたへの壁に、幾度となく往来する日本人を、知らぬ人は何と見けん。また一時近くなるほどに、温習に行きたる日には帰り路によぎりて、余とともに店を立ち出づるこの常ならず軽き、掌上の舞をもなし得つべき少女を、怪しみ見送る人もありしなるべし。

我が学問は荒みぬ。屋根裏の一灯かすかに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などするそばの机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法

令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは殊にて、今は活発々たる政界の運動、文学美術にかかはる新現象の批評など、かれこれと結び合はせて、力の及ばん限り、ピヨルネよりはむしろハインネを学んで思ひを構へ、さまざまの文を作りしうちにも、引き続きて維廉一世と仏得力三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退如何などのことにつきては、ことさらにつまびらかなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書をひもとき、旧業を尋ぬることも難く、大学の籍はまだ削られねど、謝金を収むることの難ければ、ただ一つにしたる講筵だに行きて聴くことはまれなりき。

我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などのおほかたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

59 キヨオニヒ街 [König-Strasse] ヘルリン市内の街の名。ケーニヒ街。

60 よぎりて 立ち寄って。

◆この常ならず……ありしなるべし この大変軽い、てのひらの上で舞うこともできそうな少女を、怪しみ見送る人もあったことだろう。昔の……殊にて 以前、枯れ葉のように無味乾燥な法令の条目を紙の上でかき集めていたのとは異なつて。

61 ビヨルネ [Ludwig Börne] 一七八六年〜

八三七年。ドイツの評論家。

62 ハインネ [Heinrich Heine] 一七九七年〜一八五六年。ドイツの詩人。

63 思ひを構へ 構想を練り。

64 仏得力三世 [Friedrich III] 一八三一年〜一八八八年。父ウィルヘルム一世の跡を継いで、一八八八年三月に即位したが、六月に逝去した。

65 新帝 ウィルヘルム二世 [Wilhelm II] 一八五九年〜一九四一年。父フレデリック三世の崩御後に即位。

66 ビスマルク [Otto von Bismarck] 一八一五年〜一八九八年。ドイツの政治家。鉄血宰相と呼ばれた。ウィルヘルム二世と対立し、一八九〇年に辞職した。

◆旧業を尋ぬることも難く 以前に取り組んでいた学問に取り組むことも難しく。

◆そをいかに……なからん それはどういふものかという点、およそ民間学（ジャーナリストによる批評）が流布した点では、欧州諸国の間でドイツに及ぶところはないだろう。

67 一隻の眼孔 物事の本質を見抜く鋭い眼識。彼らの仲間には……読まぬがあるに 彼らの仲間にはドイツ新聞の社説さえ満足に読めない者がいるのに。

明治二十一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ砂をも蒔け、鍬をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎珂の所は見ゆめれど、表のみは一面に凍りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿をうがつ北歐羅巴の寒さは、なかなか堪へ難かり。エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に助けられて帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食ふごとに吐くを、悪阻といふものならんと初めて心づきは母なりき。ああ、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もし真なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小さき鉄炉のほとりに椅子さし寄せて言葉少なし。この時戸口に人の声して、ほどなく庖厨にありしエリスが母は、郵便の書状を持って来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみのことにてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣に付きて我も来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名誉を回復するもこの時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやるとなり。読み終はりて茫然たる面持ちを見て、エリス言ふ。「故郷よりの文なりや。悪しき便りにてはよも。」彼

◆表街の……凍りて 中心街の人道であれば砂をまいたり、すきを振るって雪をかいたりしてあるが、クロステル街のあたりはでこぼこの激しいところも見えるけれども、表面は一面に凍って。

◆さらぬだに……いかにせまし それでなくてさえ不安定な自分の将来であるのに、もし悪阻が本当であるならどうしたらいいのだろうか。

68 鉄炉 鉄製のストーブ。

69 庖厨 台所。

70 手 筆跡。

71 とみのこと 急なこと。

◆伯の……言ひやる 伯爵が君に会いたいとおっしゃるのですぐに来てくれ。君が名誉を回復するも今この時のはずだ。気持ちが急がれるので用件だけを言い送る。

◆悪しき便りにてはよも 悪い知らせではまさかないでしょうね。

は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならん。「否、心にな掛けそ。御身も名を知る相沢が、大臣とともにここに来て我を呼ぶなり。急ぐと言へば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袴もきはめて白きを選び、丁寧にしまひ置きしゲエロツクといふ二列ぼたんの服を出だして着せ、襟飾りさへ余がために手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰もえ言はじ。我が鏡に向きて見たまへ。何故にかく不興なる面持ちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣をあらためたまふを見れば、何となく我が豊太郎の君とは見えず。」また少し考へて。「よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見棄てたまはじ。我が病は母ののたまふごとくならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシユケは、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して襟を下りつ。彼は凍れる窓を開け、乱れし髪を朔風

◆否、心にな掛けそ いや、心配しないでくれ。◆大臣に……思へばならん 大臣に面会することもあるかもしれないと思うからだろう。

72 病をつとめて 病気を治して。

73 上襦袴 ワイシャツ。

74 ゲエロツク [Gehrock(ドイツ語)] フロツクコート。



75 襟飾り ネクタイ。

◆何故に……行かまほしきを どうしてそのようにつまらなそうな顔をお見せになるの。私も一緒に行きたいのに。

◆よしや……見棄てたまはじ たとえ富や地位を手になさる日が来たとしても、私をお見捨てにならないでしょうね。

76 ドロシユケ [Droschke(ドイツ語)] 貸し馬車。



77 朔風 北風。

に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしはカイゼルホーフの入り口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を上り、中央の柱にプリユツシユを覆へるゾファを据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこにて脱ぎ、廊を伝ひて室の前まで行きしが、余は少し躊躇したり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、今日はいかなる面持ちして出で迎ふらん。室に入りて相對して見れば、形こそ旧に比ぶれば肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。◆別後の情を細叙するにも暇あらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻訳せよとのことなり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相沢は後より来て余と午餐を共にせんと言ひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路はおほむね平滑なりしに、轆轤数奇なるは我が身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなか余を譴めんとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の終はりし時、彼は色を正して諫むるやう、この一段のことはもと生ま

れながらなる弱き心より出でしなれば、今さらに言はんもかひなし。とはいへ、学識あり、才能ある者が、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯もただ独逸語を利用せんのみなり。己もまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強ひてその成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなど思はれんは、朋友に利なく、己に損あればなり。◆人薦むるはまづその能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵を失ひし舟人が、はるかなる山を望むごときは、相沢が余に示したる前途の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行き着かんも否、果たして行き着きぬとも、我が中心に満足を与へんも定かならず。貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、己に敵する者には抗抵すれども、友に対して否とはえ答へぬが常なり。

別れて出づれば風面を打てり。二重の玻璃窓を厳しく閉ざして、大いなる陶

78 カイゼルホーフ [Kaiserhof] ベルリンにあったホテルの名。

79 プリユツシユ [Pilsch] (ドイツ語)「ピロッド」。

80 ソファ [Sofa] (ドイツ語)「ソファ」。

81 躊躇 ためらうこと。

82 失行 あやまち。

◆ 別後の情を……暇あらず 一別以来の私の状況を詳しく述べるような時間もな。

◆ 彼が……なりければなり 彼の人生行路はおおむね順調であったが、不遇で波瀾に満ちているのは私の身の上の方だったからである。

◆ とはいへ、……なすべき とはいっても、学識があり、才能ある者が、いったいいつまで一少女の情愛にかかづらひて、目的のない生活を送ればよいのか。

83 成心 先入観。思いこみ。

84 曲庇者 事実を曲げて人をかばう者。

◆ 人を……若かず 人を推薦するにはまずその人の能力を示すことがいざいざだ。

◆ よしや彼に……恋にあらず たとえ彼女の愛が真実であっても、たとえ関係が深くなっていたとしても、相手の人物、才能をよく理解した上での恋ではない。

85 中心 心のうち。

◆ 我が弱き心には……由なかりしが 私の弱い心では考えを決める方法などなかったが。

86 抗抵 抵抗。

87 陶炉 陶製の暖炉。

炉に火を焚きたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さはことさらに堪へ難く、膚粟立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。カイゼルホーフへ通ふことはこれよりやうやく繁くなりもてゆくほどに、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げてうち笑ひたまひき。

ひと月ばかり過ぎて、ある日伯は突然我に向かひて、「余は明旦、魯西亜に向かひて出発すべし。随ひて来べきか。」と問ふ。余は数日間、かの公務に暇なき相沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我が恥を表さん。この答へはいち早く決断して言ひしにあらず。余は己が信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたる時は、咄嗟の間その答への範囲をよくも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難き心づきても、強ひて当時の心虚ろなりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。

この日は翻訳の代に、旅費さへ添へて賜りしを持って帰りて、翻訳の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亜より帰り来んまでの費えをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりし故、幾月か心づかであ

りけん。座頭よりは休むことあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだひと月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちのことにはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

鉄路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてななし。身に合はせて借りたる黒き礼服、新たに買ひ求めたるゴタ板の魯廷の貴族譜、二、三種の辞書などを、小カバンに入れたるのみ。さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行く後に残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんには後ろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。余は旅装整へて戸を閉ざし、鍵をば入り口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行きにつきては、何事をか叙すべき。我が舌人たる任務はたちまちに余を拉し去りて、青雲の上に墮したり。余が大臣の一行に随ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を圍繞せしは、巴里絶頂の驕奢を、氷雪のうちに移したる王城の装飾、ことさらに黄蠟の燭を幾つともなく点したるに、幾星の勳章、幾枝のエポレットが映射する光、彫鏤の工を尽くしたるカミンの火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間仏蘭西語を最も円滑に使ふ者は我なるが故に、賓主の間に周旋して事を弁する者もまた多くは余なりき。

88 失錯 失策。

89 明旦 明日の朝。
◆ 随ひて来べきか 随行としてついて来られるか。
◆ いかで命に従はざらむ どうしてご命令に従わないことがありますようか。

◆ さて……しばしばなり そうして承諾してしまつた上で、その成しがたいことに気づいても、承諾した時の思慮が足りなかつたことを無理やり覆い隠し、我慢してこれを実行することがしばしばであった。

90 常ならぬ身 ここでは、妊娠していること。
◆ 貧血の……ありけん 貧血の傾向があつたので、何か月かの間気づかなかつたのだらう。

91 ゴタ板 ベルリン南西のゴタ [Gotha] で刊行されていた出版物。

92 魯廷 ロシアの宮廷。

93 貴族譜 貴族の系図・人名録。

◆ さすがに……後ろめたかるべければ (妊娠や失業など) さすがにエリスには心細いことばかり多いこの頃であるから、私が出かけた後に残るのもつらいだろうし、また停車場で涙をこぼしたりなどすれば自分も気がかりだろうからということ。

94 知る人がり 知人のもとへ

◆ 我が舌人たる……墮したり 私の通訳としての仕事はたちまち私を連れ去り、宮廷社会の上に落としたのであつた。

95 ペエテルブルク [Petersburg] 帝政ロシアの首都。現在のサンクト・ペテルブルク。

96 圍繞 取り囲むこと。

97 黄蠟の燭 ミツパチの巣を煮詰めて作る黄色いろろそく。

98 エポレット [epaulette (フランス語)] 肩章。

99 彫鏤の工 細かい模様を彫りちりばめる細工。カミン [Kamin (ドイツ語)] 壁に取り付けられた暖炉。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはんことの心憂さに、知る人のもとにて夜に入るまで物語りし、疲るるを待ちて家に帰り、直ちに寝ねつ。次の朝目覚めし時は、なほ独り後に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書のあらましなり。

5

またほど経ての書はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき。文をば否といふ字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬ。君は故里に頼もしき族なしとのたまへば、この地に善き世渡りの生計あらば、とどまりたまはぬことやはある。また我が愛もつなぎ留めではやまじ。それもかなはで東に還りたまはんとならば、親とともに行かんはやすけれど、かほどに多き路用を何処よりか得ん。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはん日をこそ待ためと常には思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日にけに茂りゆくのみ。袂を分かつはただ一瞬の苦難なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしろくなれる、それさへあるに、よしやいかなることありとも、我をばゆめな棄てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎし頃には似て思ひ

10

定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かん日には、ステツチンわたりの農家に、速き縁者あるに、身を寄せんとぞ言ふなる。書き送りましたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなん。今はひたすら君が伯林に帰りましたまはん日を待つのみ。

5

ああ、余はこの書を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身に關はらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照らさんとする時は、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

10

大臣は既に我に厚し。されど我が近眼はただ己が尽くしたる職分をのみ見き。余はこれに未来の望みをつなぐことには、神も知るらむ、絶えて思ひ至らざりき。されど今ここに心づきて、我が心はなほ冷然たりしか。先に友の勧めし時は、大臣の信用は屋上の禽のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるるに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰りて後もともかくてあらば云々と言ひしは、大臣のかくのたまひしを、友ながらも公事なれば明らかに告げざりしか。今さら思へば、余が軽率にも彼に向かひてエリスとの關係を絶たんと言ひしを、早く大臣に告げやしけん。

15

◆賣主の間に……余なりき 客と主人の間を取りもつて用件を処理するのも、その多くは私であった。

◆彼は……忘れざりき 彼女は毎日手紙を寄こしたので、忘れることができなかつたのだ。

◆君は……ことやはある あなたは故国に頼みにする親族がないとおっしゃるので、この地で暮らすよい手段があれば、どうしておとどまりにならないことがありますか。

◆また……やまじ また私の愛でつなぎ留めずにはおきません。

101 日にけに 日増しに。

◆我が身の……棄てたまひそ 私の身体が普通の状態でないことがだんだん目立つようになりまして。そのこともあるのですから、たとえどんなことがあっても決して私をお捨てにならないでください。

◆されど……心折れぬ けれども、私が以前とは違つて決意を固めているのを見て、あきらめてくれました。

102 ステツチン [Stein] ベルリンの北東一三〇キロメートルにある都市。現在はポーランド領シュシェチン。

◆されど今……冷然たりしか しかし、今このことに気づいて、それでもなお私の心は冷静でいられようか。

103 屋上の禽 得ようとしても容易に得られないものたとえ。

◆今さら……告げやしけん 今にして思えば、私が軽率にも彼に向かつてエリスとの關係を絶とうと言つたことを、早速大臣に申しあげたのであろうか。

ああ、^{ドイツ}独逸に^こ来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならずと誓ひしが、[◆]こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。先にこれを操りしは、我が某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、^{あまがたはく}天方伯の手中に在り。余が大^{あした}臣の一行とともに伯林に帰りしは、あたかもこれ新年の旦なりき。停車場に別れを告げて、我が家を指して車を駆りつ。ここにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習ひなれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲がりて、家の入り口に駐まりぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えず。¹⁰⁴馭丁にカバン持たせて梯を上らんとするほどに、エリスの梯を駆け下るに逢ひぬ。彼が一声叫びて我が頸を抱きしを見て馭丁はあきれたる面持ちにて、何やらむ髭の内にて言ひしが聞こえず。

¹⁰⁴ 馭丁 御者。

「よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなんを。」

我が心はこの時まで定まらず、故郷を思ふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を庄せんとせしが、ただこの一刹那、¹⁰⁵低徊踟蹰の思ひは去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我が肩に寄りて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。

¹⁰⁵ 低徊 心を決めかねて同じ場所を行ったり来たりすること。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼のごとく叫びし馭丁は、いち早く上りて梯の上に立てり。

戸の外に出で迎へしエリスが母に、馭丁をねぎらひたまへと銀貨を渡して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白きレスなどをうづたかく積み上げたれば。

5

エリスはうち笑みつつこれを指して、「何とか見たまふ、この心がまへを。」と言ひつつ一つの木綿ぎれを取り上ぐるを見れば襦袢なりき。¹⁰⁶「我が心の樂しさを思ひたまへ。産まれん子は君に似て黒き瞳をや持ちたらん。この瞳。ああ、夢にのみ見しは君が黒き瞳なり。産まれたらん日には君が正しき心にて、[◆]よもあだし名をば名のらせたまはじ。」彼は頭を垂れたり。「幼しと笑ひたまはんが、¹⁰⁷寺に入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

10

二、三日の間は大臣をも、旅の疲れやおはさんとてあへて訪はず、家へのみ籠もりをりしが、ある日の夕暮れ使ひして招かれぬ。行きて見れば待遇にめでたく、魯西^{ロシア}行きの労を問ひ慰めて後、我とともに東に還る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなん、滞留の余りに久しければ、さまざまの係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ち居たりとのたまふ。[◆]その気色辞むべくもあらず。あなやと

15

[◆]こは……あらずや これは足を縛られて放たれた鳥が、ほんのしばらくの間、羽を動かして自由を得たと得意になったのと同じではないのか。

¹⁰⁶ 襦袢 おむつ。産着。

[◆]よもあだし名をば名のらせたまはじ まさか別の姓を名のらせたりはなさらないでしょうね。

¹⁰⁷ 寺に入らん日 生まれてきた子どもに洗礼を受けさせるために教会に行く日。

[◆]君が学問……足りなん 君の学問のことは私には見当がつかないが、語学力だけでもきつと世の中の役に立つにちがいない。

¹⁰⁸ 落ち居たり 安心した。
[◆]その気色……あらず その表情には、断ることなどでできないものがある。

思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名誉をひきかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。ああ、なんらの特操なき心ぞ、「承りはべり。」と応へたるは。

109 特操 堅く守って変わることをない志。

黒がねの額はありとも、帰りにエリスに何とか言はん。ホテルを出でし時の我が心の錯乱は、たとへんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き合ふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。しばらくしてふとあたりを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るるごとくに道の辺の腰掛けに寄りて、灼くがごとく熱し、椎にて打たるごとく響く頭を櫛背にもたせ、死したるときさまにて幾時をか過ごしけん。激しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めし時は、夜に入りて雪はしげく降り、帽の庇、外套の肩には一寸ばかりも積もりたりき。

110 黒がねの額 恥知らずで、あつかましいこと。

111 椎 物をたたく道具。槌。
112 楊背 ベンチの背もたれ。

113 一寸「寸」は長さの単位。一寸は約三センチメートル。

114 モハビット [Mohabit] シュプレー川北岸の地域。

115 カルル街 [Karlsruhe] モハビットを東西に通じる街路。

116 ブランデンブルゲル門 ブランデンブルク門のこと。↓4ページ注16

117 半夜 真夜中。

もはや十一時をや過ぎけん、モハビット、カルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。立ち上がりんとするに足の凍えたれば、両手にてさすりて、やうやく歩み得るほどにはなりぬ。

足の運びのはかどらねば、クロステル街まで来し時は、半夜をや過ぎたりけ

ん。ここまで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店はなほ人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えぬ。我が脳中にはただただ我は許すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき。

◆ なほ……覚えぬ 依然として人の出入りが盛んで賑やかであったはずだが、全く覚えていない。

◆ 炯然たる……似たり 光輝く星のような一つの灯火は、暗い空に透かせばはつきり見えるのだが、降りしきる鷺の羽のような雪片に、たちまち覆われてはすぐにまた現れ、それはまるで風に弄ばれているかのようなものである。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずとおぼしく、炯然たる一星の火、暗き空にすかせば、明らかに見ゆるが、降りしきる鷺のごとき雪片に、たちまち覆はれ、たちまちまた現れて、風に弄ばるるに似たり。戸口に入りしより疲れを覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふごとくに梯を上りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に寄りて襦袢縫ひたりしエリスは振り返りて、「あ。」と叫びぬ。「いかにかしたまひし。御身の姿は。」

10

驚きしもうべなりけり、蒼然として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪はおどろと乱れて、幾度か道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、ところどころは裂けたれば。

118 おどろ ぼうぼうと。

◆ 人事を……後なりき 意識がはつきりしてきたのは数週間後であった。

◆ ある日……繕ひおきしなり ある日相沢が尋ねてきて、彼は私が彼に隠していた事情を詳しく知り、大臣には私が病気であることだけを告げて、あとはいいように繕っておいてくれたのであった。

余は答へんとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまんとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。

15

◆ 人事を知るほどになりしは数週の後なりき。熱激しくて譚話のみ言ひしを、エリスが懇ろにみとるほどに、ある日相沢は尋ね来て、余が彼に隠したる顛末

をつばらに知りて、大臣には病のこのみ告げ、よきやうに繕ひおきしなり。

余は初めて病床に侍するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにかく瘦せて、血走りし目はくぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひし時、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえ上げし一諾を知り、にはかに座より躍り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか。」と叫び、その場に倒れぬ。相沢は母を呼びびとにも助けて床に臥させしに、しばらくして醒めし時は、目は直視したるままにて傍らの人をも見知らず、我が名を呼びていたく罵り、髪をむしり、布団を噛みなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。母の取りて与ふる物をばことごとく抛ちしが、机の上なりし襦袢を与へたる時、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど全く廃して、その痴なること赤児のごとなり。医に見せしに、過劇なる心労にて急に起こりしパラノイアといふ病なれば、治癒の見込みなしと言ふ。ダルドルフの癲狂院に入れんとせしに、泣き叫びてきかず、後にはかの襦袢一つを身につけて、幾度か出だしては見、見ては歎歎す。余が病床をば離れねど、これさへ心ありてには

あらずと見ゆ。ただ折々思ひ出だしたるやうに「葉を、葉を。」と言ふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾度ぞ。大臣に随ひて帰東の途に上りし時は、相沢と議りてエリスが母にかすかなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生まれむ折のことも頼みおきぬ。

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裡に一点の彼を憎む心今日までも残りけり。

◆森鷗外 一八六二（文久二）年～一九二二（大正一一）年。小説家・

翻訳家・陸軍軍医。島根県の生まれ。ドイツ留学からの帰国後、文学・医学両面に啓蒙活動を展開。創作、批評、翻訳と多方面に活躍し、日本文学の近代化に多大な功績を残した。小説に「青年」「雁」「阿部一族」、翻訳に「即興詩人」などがある。

■出典 『鷗外全集 第一巻』（一九七一年）
初出 雑誌『國民之友』第六十九号（一八九〇年一月）

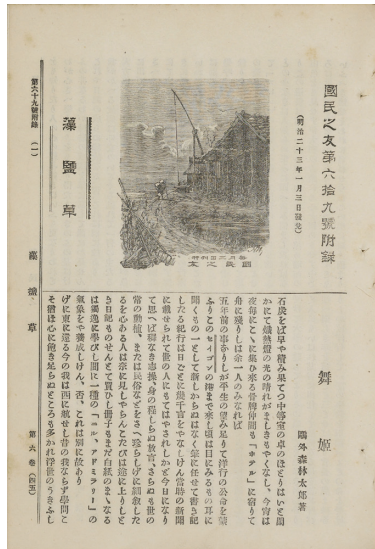
◆大臣に聞こえ上げし一諾を知り 大臣に承諾の返事を申しあげたことを知り。
119 ぬし 人名の下に付け、敬称を表す。

◆目は……見知らず 目はまっすぐに前を見たまま、そばにいる人を見分けることもできず。

120 パラノイア [Paranoia (ドイツ語)] 精神障害の一種。現在では一般に、体系だつた妄想を抱く精神障害を指すが、その定義は時代により一定しない。

121 ダルドルフ [Dallorf] ヘルリン北方約一〇キロメートルにある街。

122 癲狂院 精神病院。
◆余が病床をば……見ゆ 私のベッドから離れないが、これも意識があつてそうしているわけではないように見える。



「舞姫」が掲載された雑誌『國民之友』第69号附録の第1ページ (人間文化研究機構国立国語研究所所蔵)